

りの綿、つまり八世紀を通じて十万屯〜二十万屯の綿は大宰府あるいは交易機関の蔵に、府用分として蓄積されていたことになる。

(『県史 福岡県の歴史』「山川出版社」p 44〜45)

○78句目「官綿」についての考察(その2)

文学作品に現れる「大宰綿(筑紫綿)」についての考察

『万葉集』巻三に沙弥满誓の作の歌として次のものが残る。

沙弥满誓の綿を詠む歌一首

造筑紫観音寺别当、俗姓は笠朝臣麻呂なり

しらぬひ 筑紫の綿は 身に着けて

いまだは着ねど 暖けく見ゆ(巻三、336)

(口語訳)

(しらぬひ) 筑紫の綿は 肌にじかに着てみたわけではないが 暖かそうに見える。

〔本文、通釈は『日本古典文学全集』本による〕

この歌について林田正男氏の次のような解説がある。

「綿」は今日の木綿ではなく絹綿(真綿)のことである。神護景雲三年(769)三月の記事によれば、毎年綿廿萬屯を大宰府より都に貢物として献上することになった。また正倉院文書や平城宮出土木簡などにも記事が見られ、筑紫産の綿は当時の物産品として著名であった。なお、『日本後紀』は延喜十八年(918)七月に今日の木綿が渡来したことを記す。

(『万葉の歌』11、p 119 保育社)

(須藤 修一)